

二〇二二年度 入学試験問題

国 語

第三回

【注 意】

- ・ 試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- ・ 問題は一ページから七ページまでです。
- ・ 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- ・ 字数制限のない問題について、一行分の解答らんに二行以上解答してはいけません。
- ・ 記号・句読点がある場合は字数に含みます。
- ・ 解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

1 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

私たちは、当たり前ですが、世の中についていろんなことを知っていますし、生活する上で知っていることから大きな影響を受けます。たとえば「どうすればほんとうにダイエットできるのか」という知識(情報)には、多くの人が関心を持っています。実際にその知識に従って行動する人もいるはずで。

(1) このことは、社会を動かす力を持っているリーダーたち、**A** 政治家や経済界のトップの人たちにもあてはまります。リーダーたちは、自分たちが持っている知識、つまり社会の認識に則って組織を、そして社会を動かしていきます。一般の人でもリーダーたちでも、知識は取るべき選択や行動(ア)ホウシンに強く影響します。

しかしこの本で強調したいのは、むしろ「知らないこと」の影響です。そう、私たちの生活は「知らないこと」「知らなかったこと」にも大きく影響されています。いや、むしろ私たちは、「知っていること」に影響されるよりも、ずっと大きな影響を「知らないこと」「意図していなかったこと」さらには「予想外の出来事」によっても絶えず受けているともいえるのです。この「知らないこと」のせいで、社会は私たちが意図したとおりに動かないですし、意図したとおりに動いたとしても思いも寄らない副作用に見舞われたりします。さらに、私たちが「知らないこと」に取り囲まれているということを見逃してしまおうと、もつとひどい結果になってしまおうともあります。

一つ例をあげましょう。現在、日本は(2) 少子高齢化の問題に悩まされています。出生率は、当初思ったよりもずっと低くなりました。研究者は、なぜ出生率の低下が引き起こされたのかについていろんな研究を蓄積してきました。女性が働くようになったからではないか、若者がうまく仕事につけなくなってしまうからではないか、などです。

その膨大な研究の中に、ただ一つとして存在しない問いがあります。それは、「出生率の低下を引き起こしたのは誰か」という問いです。もう少しいうと、研究者の中には、日本で(少なくとも一九七〇年代以降の)出生率の低下を明確な意図をもって引き起こそうとした人がいて、その人のせいで少子化になったのだ、と考えている研究者は、一人もいません。

実は、私たちの世界の数多くの問題は、誰かが意図的に引き起こしたか

ら生じたものではありません。もちろん、起こってしまった問題を解決することに積極的ではなかった人はいるでしょう。日本の低出生率は一九七〇年代からすでに五〇年間近く続いていますが、少なくとも一九八〇年代までは日本国民は概して少子化の問題を明確に認識していませんでしたし、ほとんど政治的課題にもほりませんでした。しかしこのことは、「政治家が(意図的に)少子化を引き起こした」ということではありません。

B、もし誰か悪意を持っている人がいて、その人が問題を引き起こしているのなら、これほど解決しやすい問題はありません。実際には、シンコクな問題は「意図されていない」うちに発生して進行しますし、その後には非常に複雑な要因が絡み合っています。そして私たちは、研究者を含めて、この絡み合いについて実はほとんど理解できていないのです。

もうひとつ、私たちが暮らす社会について、伝えておきたい特徴があります。それは、社会を構成するさまざまな要素は、きちんとしたかたちでつながっているわけではない、ということなのです。別の言い方をすれば、つながりが「緩い」のです。さらに、社会についての個々の規則や制度、その背後にある理論・理屈も、かなりの緩さを含んでいます。

例を挙げましょう。この世にはたくさんの「仕事」がありますね。セールの仕事もあれば、食品加工の仕事もあれば、(ウ)ケイリの仕事もあります。日本の社会学は独自に「職業」を分類するシステムを構築していますが、これによれば、職業は七〇〇個程度に分類されています。同じ職業でも細かくみれば異なった仕事をしていることがありますから、仕事の数というのはそれこそ無数にあると言っても良いくらいです。

C たくさんのお仕事があるのかといえば、その一つの理由は「分業」にあります。たとえばスマートフォンがほしいとき、一人の人がそれを最初から作り上げることは不可能でしょうし、できたとしても非常に効率が悪いです。実際には、材料を作る人、そこから部品を作る人、組み立てをする人、デザインや設計をする人、販売する人、広告する人、そういった人たちをまとめて管理する人(会社の経営者)、会社に(エ)シュッシする人(株主)、など、実に様々な人が「スマートフォン」の製造・販売に携わっています。(3) この協力体制が発達することで、私たちの世界は格段に豊かになってきました。

他方で、スマートフォンの製造・販売によって得られた豊かさ(利益、会社や社会全体で儲かったお金)を、それに携わった人に分配する際には、

(4) 独特の問題が生じます。「分配」というのは、儲かったお金を、仕事をしてくれた人たちに配ることです。

話を簡単にするために、一つの小さな会社について考えましょう。その会社はスマートフォンの小さな部品を作っています。会社には、部品を加工・製造する人、部品を売り込むために営業する人、会社のお金の管理（ケイリ）をする人、合計三人がいます。部品が思いのほかよく売れたので、昨年一年間で二〇〇〇万の余剰金、つまり部品を製造するためのコストを除いた上で儲かったお金が生まれました。このなかから、会社で将来のためにとっておくお金や（^オ）シャツキンの支払いのためのお金を除いた上で報酬を分け合うのですが、その際の基準を決めることはかなり難しいでしょう。三人とも会社の運営に必要な、重要な仕事をしているという自負はあります。しかし報酬は個別に、何らかの分配方法を決めて支払うしかありません。

D 会社は、年功や資格といったいろんな基準で給与を決めます。「AさんはBさんより五年も長く勤めているから、Aさんには多めに支給しよう」とか、「BさんはCさんが持っている資格を持っているから、Bさんには多めに支給しよう」とか、そういう判断をするわけです。しかしほんとうにこれらの基準が適正かといえ、そんな保証はありません。「よくわからない」というのが実態です。しかし、この「よくわからない」規則やシステムは社会に広く行き渡っていて、みんなそれに従っているのです。ここで強調しておきたいのが、「協業」（一緒に協力して仕事をする）こと）のシステムと、それによって生み出された利益の「分配」システムが、意外なほど緩やかでしかつながない、ということ。この仕事は利益の何%にあたる」といった明確な対応規則があった上で分配がなされているわけではありません。実は、利益を分配する基準は、緩々（ゆるゆる）です。

「お金に関係するのにそんなに緩々でいいのか」と思う人もいるかもしれませんが、実は世の中そんなものなのです。

もう一つ、世の中の「緩さ」の例を挙げておきましょう。やはり「仕事とお金」のことです。みなさんは、もし自分の財布から誰かが無断で一万円を抜き取ったら、「泥棒！」と言いたくなるでしょう。他方で、もし自分と同じ職場で、種類も大変さも同じような仕事をしている人が、自分の二倍も多く給料をもらっていたらどうでしょう。会社で働いたことがない人

は「そんな馬鹿なことが」と感じてしまうかもしれません。非正規雇用（パートタイマーやアルバイト、派遣社員など）の人と正規雇用（いわゆる正社員）の人の待遇格差として、これは決してありえない話ではありません。このとき、非正規雇用の人が「泥棒！ お金を返して！」と叫んで正規雇用の人の財布からお金を抜き取ったら、今度はその人が窃盗罪に問われることとなります。

財布からお金を抜き取ることも、不当に給与格差があることも、本来その人に属しているはずのお金が失われることに変わりはないのですが、なぜか二つはずいぶん違った理解をされているのです。やはり世の中のお金のやりとりというのは、⁽⁵⁾「ずいぶんと緩い規則の上でなされている」といいたくありません。

（筒井淳也『社会を知るためには』）

問一 —— (1) 「このこと」とありますが、これはどのようなことですか。説明としてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 世の中を流れてくる情報に、多くの人々が関心を持つということ。
イ わたしたちは、知っていることから影響を受けるということ。

ウ 人々は「ダイエット」などの情報にふりまわされがちだということ。
エ わたしたちは、知っていることよりも知らないことのほうが多いということ。

問二 —— (2) 「少子高齢化の問題」とありますが、筆者が、この問題の研究を例として、主張しているのはどのようなことですか。この箇所より後の語句を用いて、解答らんに三行以内で説明しなさい。

問三 —— (3) 「この協力度制」とありますが、これが指すものを漢字二字で文中から抜き出しなさい。

問四 —— (4) 「独特の問題が生じます。」とありますが、生じるのはどのような問題ですか。解答らんに二行以内で説明しなさい。

問五

——(5)「ずいぶんゆゑと緩い規則の上でなされている」とありますが、ここではどのようなことを指していますか。解答らんらんに四十五字以内で説明せつめいしなさい。ただし「正規雇用こぎょう」「非正規雇用」という語は使用しないこと。

問六

A D に当てはまる語を次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

ア そもそも イ たとえば ウ なぜ エ そこで

問七

——(ア)～(オ)のカタカナを漢字に書き直しなさい。

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 社会にはさまざまな仕事があるが、それはおおまかに物づくりをする仕事と事務的な仕事に分けられ、前者のほうが社会を豊かにすることに役立っている。

イ 社会で起こっていることには計画されたものではないことがあり、また、仕事と賃金の関係など、対応関係が明確に決められていないこともある。

ウ 社会のリーダーは自分の意志で社会を動かそうとするが、少子高齢化の問題のように、リーダーの知識不足が原因でうまくいかないこともある。

エ 社会には取り締まりの「緩い」ことが多くあり、そのために非正規雇用の違法な労働などが放置されることが起きている。

2 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

昭和十六年五月二十九日、洋次郎と洋の兄弟は大阪の電気科学館にプラネタリウムを見に来た。プラネタリウムの館内には澄んでよく通る声の女の子が母親と一緒にいて、プラネタリウムをほんものの夜と勘違いしたようにあくびをするので、洋は小さな子なのだろうと思う。

みどりいろの矢印がうつるランプを使って、五月の星座をゆっくり説明していた解説者は、大熊座のところにくると、おきまりの北斗七星と北極星の説明にとりかかった。

それやったら、ほくかて知ってるわ……。洋はこのあいだ読みおわったばかりの天文学入門の解説を思い出した。北斗七星さえ見つけたら北極星はすぐに見つけられるし、北極星さえ見つけたら方向がわかる、こらゼツタイや、ちゆうやつやろ……。

説明もたしかにそのとおりのことをしゃべっていた。ところが、そこで思いがけないことをいじしたのである。いまはひしゃくの形をしているこの七つ星（ほんとは、柄の先から二つめの星ミザルに、アルコルと呼ばれる五等星がついて八つ星であることまで、洋は知っていた……）が、いつかは形がくずれる、というのである。

そんなアホなことが、と洋は思わず洋次郎のひじをつついた。洋次郎もそのことは聞き初めらしく、ほんまかいなと声にだしてつぶやいた。兄弟の頭のなかには、まだ絶対に動かず変わらぬものとしての北極星と北斗七星が輝いているのだった……。

—ではちよつと、そのようすをお目にかけましょう……。

解説者がいうのと同時に、軽いモーターのうなりがして、北斗七星だけが少しずつ動きはじめた。両はしの星は西へ、あとの五つは東へ動いていて、ひしゃくの形がどんどんくずれていった。

—これで、五万年から六万年のち……。

解説者は A いい、ひしゃくがすつかりくずれたところで、これが十万年後の北斗七星です、と結んだ。

—それからついでにつけ加えますと、北極星も変わります。いまの北極星は、地球が自転している軸の方向にたまたま見えるから天の北極にあり、

北を指すのですが、一万三千年前は織女星が北極星でした。ですから、いまから一万二千数百年後には、また織女星が北極星になるはずですよ……。

解説者が機械のボタンを押すと、くずれた北斗七星は、またおそろしい早さで（なにしろ十万年なのである……）元にもどりはじめ、数十秒のうちに、昭和十六年五月二十九日の北斗七星の姿にかえっていた。

—もう十万年すぎてしもたんか……。洋はあつげにとられて空をながめ、

—ほんまに人をびつくりさせる機械や……。

正直に声にだした。

—おれもやでエ。

洋次郎も正直だった。その日、兄弟の頭のなかで、ゼツタイに変わらぬはずのものが一つ、静かにくずれたのだった。

北斗七星の話にあんまり驚いたので、洋の耳にはあとの解説の声がはいらなかった。気がつくと、いつかドームの空の星は B へっついて、東の空がほんものの夜明けの紅いろに染まりはじめていた。

—それではこのあたりでおしやべりはおしまいにして、心静かに五月三十日の朝を迎えることにいたしましょう……。

解説のしつぽだけが、ようやく洋の耳にとどいた。声にかわって、優しい音楽が流れ、星はみるみるうちに姿を消し、太陽が顔をのぞかせた。なんやほんまに一晩すぎてしもた気がするなあ、と洋はまだ立ちあがれずにいた。すつかり明るくなったとき、館内のシートの三分の二くらいを埋めていた見物客たちは、もう半分以上、出口から消えていたし、洋次郎ももう二、三步歩きだして、ぐずぐずしている洋を見ながら、ほんとの朝のようにあくびをした。そこで急に、さっきのあくびの主のことを思いだして、洋は立ちながらふりかえった。

シートには、母娘のかわりに、かわいい麦わら帽子がふわんとすわっていた。

—あの子、忘れていきよつたな。

洋が声をあげた。

（中略）

ふたりがそろって電気科学館に引き返し、玄関から入ったとき、横のエレベーターのほうから、あの澄んだ声がとびだしてきた。

—そやかて、うち、ほしいもん……。

その声に引かれたように、洋は気がつくと少女の前に立っていた。うつ

むいたまま、あの、これ忘れてはりました、と帽子をさしだした。

—いやあ、うれし！ いまもどつてさがしてたけど、なかったん……。

それから、ほんまにほんまにおおきにイ……と、尻上りの甘い口調で礼をいった。うつむいたままだった洋は、目の前の少女の銀青色の服が、ちつとも動かないのに気づいて、あわてて目をあげ、もつとあわてなければならなかった。お礼のしるしに、とでもいうふうに、握手のかたちに手をさしのべていたのである。おまけに、少女は洋が思っていたよりずっと大人びてみえるくらいに大きかった。

うへっ、やないか、二重にうへっやないか……と、洋次郎はそんな少女のようすを見ながら思っていた。洋次郎の想像は半分当たって半分外れていた。少女はたしかにあの麦わら帽子にびつたり、ひきしまった小さな顔の持主だったが、色はぬけるほど白かった。それに、黒い長い髪の毛が、顔の白さをいつそうひきたてていた。まぶしいみたいに白いわ、と洋次郎がまるでお日さんをじかに見たときのように目を細めたとき、——少女のほうからさっさと洋の手を握った。それから、にっこりと笑うと、くるんとまわれ右していつてしまった。洋次郎の目の奥には目も鼻も口もない、まぶしいくらい白い顔だけがやきついていて——道であつてもわかりそうになかった。

洋は、相手ににぎられた右手が、ちーんとしびれてしまったみたいで、ほんやり立っていた。京ことばというのだろうか、少女の母親が、歌うようにゆったりした調子でお礼をいうのも、耳に入らなかつた。洋の目の前を、きれいな魚が泳ぎ去るように、銀青色の服がゆれて——消えた。

—あ、もういつてしまいはったんか。

洋次郎が思わず声にだしたとき、洋はあやつり人形みたいにぎこちなく右腕をあげていた。玄関のガラス戸ごしに、少女が大きく右手をふるのが見えたからだ……。

—だれや、あの子？

—知らん。

—知らんちゆうたかて、握手したり、手エふったりして、こいつ……。

洋次郎は、うらやましさをかくさなかつた。

—そやかて、今日初めて会うたんやもん。

初めてで握手か……。洋次郎はめずらしい動物でも見る目つきになつて、弟を見直した。洋はまだ胸に麦わら帽子をかかえているような手つき

で、**C** 立っていた。洋次郎はゆつくりとその手つきを押しもどしてやりながら、ほな、帰るで、といった。

兄弟は心斎橋まででると、塩町筋に曲がり、そのままゆつくり歩きつづけた。末吉橋に近いわが家まで、子ども足でもそんなにかからぬ。もつとも、洋一人なら、このあたりの小学生のグループに追いたてられるかもしれなかつた。けれど、今日は白線四本入りの今宮中学校の帽子をかぶつた兄といっしょだから、その心配もなかつた。堺筋の電車を渡るまで、二人とも無言だった。渡りおわると、洋次郎が、おなかへつたなあ、木村屋でパン買っていか、とさそつた。ん。それもつて内田の伯父さんここへよつて、お茶よばれてたべよか、と洋もうなずいた。内田の伯父は、長堀橋の北に、かなり大きな料亭を開いていた。兄弟のかあさんの兄である。

大きな石垣がずんと胸をはるようなどつしりした正面でなく（伯父はいつも、ここから入つてくるんやで、といつてくれていたが）、横手の家族用の入口から入ると、うなぎの寝床みたいに細長い土間があり、ちよつと暗い。つき当りが広い調理場の横で、いついつても独特のにおいがした。お菓子やサイダーといった子ども用のおいとちが、体全体をまあるく包みこむような大人向日本料理と、かんした酒のにおいだつた。それをふつきるようにさつさとあがり、帳場を横切つて、そのまま伯父の部屋に入ると、たいてい伯母が、ようおいで、と迎えてくれる。

ところがその日はようすがちがつた。ええとこへきてくれた、きて早々だすけど、二人ともびつくりしたらあきませんで……。伯母が小さな体そのままに声までひそめ、二人を奥の座敷へ手招きしたのである。

—あんとこのおとうさんがな、さつきうちでけがしはったんや。車をおりるなり、石垣にでぼちんぶつけはったんや。

あのおとうちゃんが、この昼間から、そんな子どもみたいに……。兄弟は顔を見あわせた。ふたりの頭のなかに、いつも仕立てのいい背広を**D** 着こなして、おこつた顔を見せたこともない父の洋太郎の姿が同時にうかんだ。大丈夫や、心配せんかてええ——父はそつたような顔をしてた。それなのに伯母は、そんな父の像を消しゴムで消すようにつづけた。

—とにかくすぐに、うちのかかりつけの大内先生にきてみてもらたけど、縫わんならいいはるさかい、関口病院へつれていきましたのや。その帰りし、おかあちゃんがうちへよるさかい、ここで待つとなはれ。

兄弟はまた顔を見合わせた。あのおちついたおとうちゃんが、そんなことになるやなんて……。そこでまた同時にふたりの頭のなかで、⁽⁴⁾北斗七星がゆっくりとくずれば始める気がしていた……。

おかあちゃんはなかなか現われなかった。ふたりの胸の奥に⁽⁵⁾砂漠がひろがり始める。洋は目をとじた。頭にほうたいをした父の姿が、うつすらと見える気がする。それから、そのほうたいの白さがぶくんとふくれると、麦わら帽子の少女の白い顔につながっていった。やがて、白い顔のなかに、自分にやわらかな視線をおくっていた目が生まれ、目の下の泣きぼくろ（二つもあった）が、見えてきた。それから、かたちのいい鼻のすぐわきの、かなり大きなほくろまでちゃんと見えてきたとき――⁽⁶⁾いま、そんなことを考えている自分のことが、おとうちゃんにすまない気もちになって、洋は自分のももをきゅんとつねってやった。

（今江祥智『ぼんぼん』）

135

130

125

問一

——(1)「ほんまに人をびっくりさせせる機械や……。」とありますが、洋がプラネタリウムを見て驚いた理由がいくつかあります。含まれる理由としてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 数十秒で十万年後の空から現在の空に戻ることができるから。

イ 終わると洋次郎があくびをしようほほど朝の風景を精巧に再現していたから。

ウ 絶対に変わらないと思っていた北極星の形が変わる未来を映し出したから。

エ 解説者が説明のタイミングに合わせて自在に夜空を動かせるようになっていてから。

問二

——(2)「銀青色」とありますが、色を使った次の一～五の成句の意味を、後の「意味」ア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

一 紺屋の白袴

二 朱に交われれば赤くなる

三 くちばしが黄色い

四 腹が黒い

五 紅一点

「意味」

ア ずるくて、悪い考えをもっているようす。

イ まだ年が若くて、未熟であることのとえ。

ウ 他人のためにばかりいそがしくて、自分のことはおろそかにするものだ、ということ。

エ 人は、まわりの環境や人に影響されやすく、付き合う友だちに

よってよくも悪くもなるということ。

オ 男の人の中に女の人が一ひとりだけ交じっていること。

問三

——(3)「洋次郎はめずらしい動物でも見る目つきになって、弟を見直した。」とありますが、この時の洋次郎の心情を、解答らんに六十文字以内で説明しなさい。

問四

——(4)「北斗七星がゆっくりとくずれば始める気がしていた」とありますが、言おうとしているのはどのようなことですか。解答らんに二行以内で説明しなさい。

問五

——(5)「砂漠がひろがり始める。」とありますが、この時のふたりの心情を、解答らんに二行以内で説明しなさい。

問六

——(6)「いま、そんなことを考えている自分のことが、おとうちゃんにすまない気もちになって、洋は自分のももをきゅんとつねってやった。」とありますが、洋が父にすまないと思ったのはなぜですか。理由としてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア けがをしたあとの父を実際にはまだ見ていないのに、勝手に弱々しい姿を想像してしまったから。

イ 父が大変な目にあつたとも知らずに、伯父の家で買ったパンを食べることばかり考えていたから。

ウ けがをした父を心配するべきときに、その日に会った少女のことを、顔を鮮明に思い出すほど考えていたから。

エ いまは兄弟で互いに支え合うことが父の願いであるはずなのに、洋次郎のことを忘れて母がいつ来るのかということまで頭がいっぱいになっていたから。

問七

A D に当てはまる語を次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

ア ゆったり イ あっさり ウ ぐんと エ ぼやんと

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア プラネタリウムの解説者は、ボタンを使って機械を自在に操作しており、説明もわかりやすいうえに、洋次郎も洋も知らないことばかり話してくれた。

イ 洋次郎はプラネタリウムに連れて行ったりパンを買ってやつたりと甲斐甲斐しく洋の面倒をみているが、心の底では洋を嫌っている。

ウ 伯母は洋次郎と洋の母の兄嫁で、突然やってくる二人のことをいつも優しく迎え入れてくれ、父がけがをした時も二人がシヨックを受けないよう配慮している。

エ 洋は天文学入門の解説を読んでいるほど天文学に詳しいので、数万年後の将来に天体が変わることも当然知っていた。

